

Alexander Schunka

Die Hugenotten. Geschichte, Religion, Kultur

林 祐一郎

グローバル化が進む中、国境を越えた移動の問題は歴史学でも多くの関心を獲得している。特に人の移動という点では、移民の歴史が注目される。本稿で紹介する『ユグノー』（以下、「本書」と略記する）の著者A・シュンカも、こうした移民の歴史に取り組んできた。ここで著者について簡潔な紹介を付しておこう。著者は一九九九年にミュンヘン大学を卒業後、同大学の修士課程、博士課程へと進学し、二〇〇四年に博士号を取得した。彼の博士論文は、二〇〇六年に『留まる客人たち……一七一一八世紀におけるクールザクセンとオーバーラウジッツへの移住者たち』^①という題で出版されている。彼の主な取り組みは歴史的移民・移動研究で、その他に近世宗教史、文化交流史、そして物質文化史も研究対象としている。彼はこれまで、ドイツを主とする近世中欧の様々な移民現象に注目してきたが、本書もその文脈に位置するものと考えられる。

評 書
本書はユグノーを前近代の重要な移民集団と位置付けているが、彼らがこのように評価されてきた背景には、後世に形成された「ユグノー神話」の存在がある。つまり、フランスで宗派対立の「犠牲者」となったユグノーたちは、「寛容」な受け入れ諸国へ

亡命することで活路を見出し、結果的に受け入れ先の技術的・経済的・文化的発展へ寄与したという「成功史」の語りが、彼らの特権付けてきたのである。翻って受け入れ側からは、ユグノーたちは自国に利益をもたらす「有用」な移民の代表例として語られてきた。例えばドイツ帝国の宰相オットー・フォン・ビスマルク（一八一五―一九八）は彼らを「最も良きドイツ人」として称揚し、また国民社会主義政権の思想家アルフレート・ローゼンベルク（一八九三―一九四六）は彼らを「北方」集団に分類して、国内の他の少数派、特にポーランド人やユダヤ人と比べて優位に置いた。^②

こうした認識に対して、ユグノーの大亡命をもたらしたナント勅令撤回から三百周年を迎えた一九八五年前後より多くの研究成果が積み上げられ、学術的相対化が進んできた。本書はユグノー史の通史的研究として、一定の到達点を示している。本書ではユグノー史研究の地理的視野が大きく広げられ、単線的な「成功史」に回収されない複雑さをもつて移民史が叙述されている。また著者は、移民たちを単に数量化し、「有用性」の観点から評価することを拒否する。

まず第一章では、「ユグノー」が何者であるのかの説明されている。ここでは出自に関する基本情報の他、名称の由来についても様々な説が紹介される。従来の学説を踏まえつつ、著者は、これまでの様々な方法や視点に基づくユグノー史の語りこそが、彼らをめぐる自己表象の多彩さの背景を成していると指摘する。本書は、そのような様々なユグノー史の叙述を相対化する試みでも

ある。

第二章では、ユグノーの起源となる宗教改革的諸思想と、その組織化が主な対象となっている。フランスにおけるカトリックとプロテスタントの敵対関係は軍事的衝突をもたらすことになったが、著者はそれを宗派的要因が政治的要因、地域の実態、そして貴族の家産の利害と重なり合った長期的な過程の結果であると述べる。

第三章では、ユグノーへの宗派政策的圧力の増大とユグノー戦争（一五六二―一九八）が扱われている。ここではカトリック陣営による迫害に関するユグノーの語りが相対化されつつ、宗派対立の過程で何度も和平の試みが見られたと強調される。またユグノーたちの背後にはプロテスタント諸国からの支援があったということが指摘されている。そして著者は、宗派対立の裏で、ドイツ農民戦争（一五二四―二五）と同様、旧秩序の社会的・政治的改革への諸要求が複合していたのだとする。

第四章は、ナント勅令発布後、ユグノーたちが現状を既成事実化しようとした過程を取り上げている。一方で著者は、ナント勅令以後のフランスの「寛容」な宗派政策は同令撤回に至る嵐の前の静けさでしかなく、宗教的・国家的同質化という目的は貫徹されたと強調し、この頃に行なわれた国内でのカトリックの宣教活動や内地植民を紹介する。著者の叙述はルイ十四世時代のユグノー抑圧政策へと続くが、多くのユグノーたちがフロンドの乱（一六四八―五三）でカトリック君主の側に立ったことや、王権の経済政策で彼らが活躍した事実に触れることは忘れられていない。

第五章では、いよいよナント勅令撤回に伴う大亡命が描かれる。

一七世紀後半のユグノーの大亡命は、当事者にとっては一時的なものであり、数ある選択肢のうちのひとつだったばかりか、場合によっては必ずしも強制されたものではなかったという。ここでも注目されるのはブランデンブルク・プロイセンでの受け入れ事例である。もともと、ここで描かれるのは単なる「成功史」ではない。彼らの入植は現地民やルター派聖職者との摩擦をもたらしたため、亡命者たちが受け入れ先で必ずしも平穏な生活を送ったわけではなかったという。

第六章では、ヨーロッパの海外にも広がったユグノーたちのディアスポラが描かれる。彼らはナント勅令撤回以前から王権と協力し、東洋まで至るフランスの海外進出に少なからぬ役割を果たしていたという。またナント勅令撤回後のヨーロッパにおけるディアスポラという観点では、ユグノーが軍人や技術者として受け入れ諸国の産業の強化や常備軍の設立に寄与したことが語られている。更に、亡命の波は東方のロシア帝国やオスマン帝国にまで及んだという。本章の後半では一七〇〇年以降のディアスポラが扱われるが、ここでまず示されるのはユグノーと植民地主義との協力関係である。イングリランドやネーデルラントの東インド会社にはユグノー系社員が少なくなかったばかりか、ユグノーが奴隷貿易にすら関与していたのである。本章の終盤では「ユグノー神話」が取り上げられる。特に目を惹くのは、ユグノー共同体の指導者たちをヒトラー政権の支援者にした、ユグノーたちによる君主や国家への特異な精神態度に関する記述である。著者は、その背景として彼らが例えばプロイセンやドイツの指導者層から「有用」な少数派として評価されてきたことに触れ、ユグノーた

ちが他の非同化的かつ「有用」ならざる少数派への対照例として機能してきたのだとする。

第七章では、本書の総括がなされる。著者は、過去と現在を安易に比較することに警鐘を鳴らしつつも、ユグノー史研究の現代的意義をこう説明し、結びとしている。「目下の亡命・移民事象、そして政治やメディアにおける度を越した議論を前に、恐らく歴史への視線は、同時代のいくつかの問題をより良く理解し、基礎定数を認識し、あらゆる参与者に耳を傾け、彼らから学び、果てには冷静さを得ることに役立つのである」^③。本書がドイツ語で書かれていること、またドイツが移民や難民を巡る問題に目下直面していることを考慮すれば、本書がドイツ的な文脈に位置付けられたものであることが、総括から読み取れる。

以上が本書の要約である。以下では、①ドイツのユグノー史研究における本書の位置付け、②評者が専門とするプロイセン史研究から見た本書の寄与と限界という二点から本書の評価を試みる。

まず、①の観点から本書に対する評価を試みよう。そもそもユグノーに関する歴史叙述は、殉教や亡命の経験を同時代のユグノーたちが書き残した一六―一七世紀頃から始まっており、ユグノーたちを敬虔で無垢な「亡命者」(Religie)として描く傾向が強かった。その後、ナント勅令撤回に伴う大規模な亡命現象から数世代を経た一八世紀には、受け入れ先に定着した彼らの子孫たちが、受け入れ先で為した自分たちの技術的・経済的・文化的貢献を強調し、一九世紀にはそれが現地のナショナリズムと親和的に結び付いていった。他方、ユグノーを「他者」として眼差すド

イツ人たちも、先進的で同化的なユグノーを「我々」の共同体に近い存在、あるいは「有用」な少数派であると認識するようになっていた。旧来のユグノー史は、例えばドイツにおけるユダヤ人やポーランド人など、同化的でなく、あまり有用でないと考えた他の少数派との対照で語られてきた。著者も出版記念インタビューで語っているが、ユグノー研究史上の大きな問題点はここにあった。^⑦しかし一九八〇年代、社会史研究の進展とナント勅令撤回三百周年という記念行事が重なり、ユグノーの受け入れ先への貢献に対する評価が実証的に相対化されると共に、ユグノー研究が非ユグノー系研究者たちによって取り組まれることが多くなった。^⑧現在では相対化作業がひと段落し、何故ユグノーが共同体内外でこのような評価を受けるに至ったのか、自伝や歴史叙述を通して検討する研究が隆盛している。本書はこうした研究の成果を踏まえ、一定の到達点を示している。

他方で著者は、ナント勅令撤回に至るまでのフランスにおけるユグノーの歴史をより詳細に整理している。これまでドイツのユグノー史研究はユグノーを専ら外国からの移民集団として扱うことが多く、フランスにおける彼らの宗教生活や政治活動はあくまで前史として後景に退いていた。この結果、従来の研究でユグノーたちは均一な外国人集団として描かれていたが、著者はユグノーたちのフランス時代を詳細に検討することで、こうした一面的な叙述を回避している。また彼は地理的範囲を広めることにより、ヨーロッパに止まらないユグノーの歴史を活写している。そこから見えてくるのは、「ヨーロッパにおける宗教迫害の被害者」と「海外における植民地主義への協力者」という、彼らの一枚岩

ではない姿である。本書の大きな特徴の一つは、対象の空間的拡大による、この多面性の叙述である。

次に②の観点から評価を試みる。一六八五年のポツダム勅令に始まるユグノー大規模受け入れは、近世プロイセンの他者への「寛容」、そしてその結果としての産業振興を示す代表例として位置付けられ、この大事業が後世のプロイセンの強国化に繋がったとも言われてきた。これに対して一九八〇年代以降の諸研究は、ユグノー受け入れの経済的效果を限定的に評価し、またユグノーたちに与えられた「寛容」な措置すらも様々な利害の上に成り立つたものであると強調している。とはいえ、ユグノーがプロイセンの「近代的」な発展に寄与したことは完全には否定されず、かつて軍国主義や封建主義の権化とされたプロイセンの「リベラル」な側面を再評価する通史的な語りにおいて、ユグノーは「近代化」の触媒となった外国人としての位置を与えられている。^⑪

そのような動向の中でも、著者は従来の語りに対して更に懐疑的な立場を採っている。ブランドンブルク・プロイセンが扱われる第五章で、著者は受け入れ側の「隣人愛」を完全には否定しないまでも、概して受け入れ側の打算やプロテスタント同胞の団結そして何よりも難民たち自身の都合に応じた自主的な亡命先選択といった問題を強調している。つまり、移民や難民の主体性にも注目することで、従来のプロイセン史における語りをほぼ完全に打ち消しているのである。こうした見方は、プロイセンを「寛容」の国として評価する通史的叙述や、現代的な「寛容」の歴史としてユグノー受け入れを想起する昨今のリベラルな市民運動と

も一線を画し、手放しのプロイセン礼賛に一石を投じる力を持っている。更に著者は、ユグノーを近世のグローバルな移動集団として扱うことで、プロイセン史の文脈におけるフランスからプロイセンへ、「先進的」な西方から「後進的」な東方へという一方向的で上意下達的な歴史像を書き換えている。

だが、そのような本書にも限界はある。それは、本書がユグノーの全史を扱おうとしながらも、近代以降の叙述があまりにも薄く、そのためにユグノーたちの自己認識の動揺や変容の過程が説得的に描けていないことである。ドイツ本国の個別研究でも個人の自伝的記述に注目した研究が試みられているが、多くの課題を指摘しつつも、大きな歴史像の提示には至らず、そうした近況が本書に反映されたものと考えられる。この限界は本書の根本的な価値を下げるものではない。だが、これがユグノー史研究の今後の課題をも示唆していることは認識しておかねばならない。本書において空間的拡大は十分に為されたが、次は時間的拡大が必要である。また、近世と現代の移民集団を比較する研究などはない。単なる時間的拡大ではなく、「繋がり」を重視した時間的拡大も必要である。

日本では近年、「記憶」や「想起」の歴史学が注目されるようになった。^⑫ユグノーの歴史も、近世から近代へと時計の針を進めていけば、そうした問題意識に応えるような材料を数多く持っている。塚本栄美子による諸研究は、近現代におけるユグノーたちの自己認識や歴史認識を追ったものであるが、こうした研究を蓄積して、近現代へと至る歴史像を明示することが、日本国内外を

問わず、近世移民史研究の課題である。昨年晩秋の現代史研究会で、ドイツ史研究者の今野元は「近代以前の知識なしに」「ドイツ現代史」研究はなり立たない^④と表明したが、評者はこれを裏返してこう言いたい。近代以後の知識無しに「近世史」研究は成り立たない。学問的な真理を探究するためには、時には時代区分の枠を取り払うことも必要である。そのためには近世から近代、そして現代へと歴史を繋ぐ一連の具体的な「軸」が必要である。評者は、それがユグノーたちの教会や居留区であり、そうした基盤の上に成り立った歴史協会であると確信している。今後はそういった「軸」を検討対象とし、時代横断的に研究することが手法の一つとして求められるであろう。

最後に、本書の概説書としての意義に少し触れて、結びとしたい。移民・難民問題がドイツを取り巻く中で、著者の強い問題意識の上に成立した本書は、一般向けの概説書としてはやや難解な言葉遣いや論理展開も散見されるが、ユグノー側からの成功譚的な語りとも、受け入れ社会による多数派からの「上から目線」の語りとも異なるユグノー史の在り方を示し、それを広く発信しようとしたという意味で価値がある。また本書を起点の一つとしてこれから著者やその周辺の研究者たちが移民・難民問題についてどのような発言をしていくかも見所である。

- 評書
- ① Schunka, Alexander. *Gäste, die bleiben. Zuwanderer in Kursachsen und der Oberlausitz im 17. und frühen 18. Jahrhundert*. LIT Verlag. Münster u. a. 2006.
- ② Schunka, Alexander. *Die Hugenotten. Geschichte, Religion,*

Kultur. C. H. Beck. München. 2019. S. 120-121.

③ *Ebd.*, S. 127.

④ *Ebd.*, S. 9-11. 「一六世紀」「十七世紀それぞれ亡命経験者による代表的な著作として」は以下の二つを挙げている。Crespin, Jean. *Le Livre des Martyrs*. Genève. 1554. Ancillon, Charles. *Histoire de l'établissement des Français réfugiés dans les états de l'Electeur de Brandebourg*. Berlin. 1690.

⑤ Schunka, *Die Hugenotten*, S. 120-121. 例えは一九世紀「ヒスマルタはユグノーを統合された外国人の模範例として引用し、帝国内のポーランド人の「ゲルマン化」に資する存在として位置付けた。以下参照。Rosen-Prest, Viviane. "Willkommene Fremde? Zwei Jahrhunderte Geschichtsschreibung über Hugenotten im deutschen Refuge (17-19. Jahrhundert)". in: Becker, Judith und Bettina Braum (Hrsg.). *Die Begegnung mit Fremden und das Geschichtsverständnis. Vandenhoock und Ruprecht: Göttingen*. 2012. S. 147-149. 更に「世紀」「国民社会主義時代の人種理論家たちは「ユグノー」と「アイン民族」との近似性を強調していた。以下参照。Führich-Grubert, Ursula. *Eine Minderheit und ihre Obrigkeit. Deutsche Hugenotten im Dritten Reich*. Verlag des Deutschen Hugenotten Vereins. Bad Karlshafen. 1995. S. 4-7.

⑥ ユグノーの受け入れ先への貢献を限定的に評価するようになった一九八〇年代頃以降の研究に「さう」つけた枠組みは残存していた。以下参照。Jersch-Wenzel, Stefi. *Juden und „Franzosen“ in der Wirtschaft des Raumes Berlin-Brandenburg zur Zeit des Merkantilismus*. Colloquium-Verlag. Berlin. 1978. Jersch-Wenzel, Stefi, Barbara John, Eckart Binsfeld u.a. (Hrsg.). *Von Zuwanderern zu Einheimischen. Hugenotten, Juden, Böhmen, Polen in Berlin*.

Nicolai: Berlin, 1990.

- ⑦ 著者は本書出版直前に公開された、ベルリンの左派系日刊紙『ターゲスツァイトウング』(*Die Tageszeitung*, 略称: TAZ)のインタヴューで、受け入れ側の諸侯の期待にエグノーは答えられたのかという質問に対し、こう答えている。「フランデンブルク・プロイセンの選帝侯は単に、彼が望んでいた、経済的な潜在能力のある移民たちを得ただけというわけではありませんでした。ここには、エグノー研究の大きな問題が今日でも残っているのです。移民たちはかなり頻繁に、損得に基づいて類別されています。つまり、移民たちには有用な者とあまり有用でない者で二分類されているのです」<https://taz.de/5567627/【2011年11月11日閲覧確認】>

- ⑧ Schunka, a.a.O., S. 11. の時期の代表的な研究成果として、以下の論文集が挙げられる。Thadden, Rudolf von und Michelle Magdeleine (hrsg.), *Die Hugenotten*, C. H. Beck: München, 1985. とりわけ同論文集所収のタッデン論文とフランソワ論文は、エグノー系プロイセン人のプロイセン愛国主義、次いでドイツ・ナショナリズムへの順応過程を扱うことで、近世から近代へと至る大きな歴史像を提示しようとした。以下参照。Thadden, Rudolf von, „Vom Glaubensfluchtling zum preußischen Patrioten“, in: Thadden und Magdeleine, *Die Hugenotten*, S. 186–197. François, Etienne, „Vom preußischen Patrioten zum besten Deutschen“, in: Thadden und Magdeleine (hrsg.), *Die Hugenotten*, S. 198–212. 二かノリとした歴史像に対しては、個別事例研究から修正提案がなされている。以下参照。Rosen-Prest, Viviane, „Paul Erman (1764–1851): Ein Sprössling der Französischen Kolonie geht seine eigenen Wege“, in: Violet, Robert, Manuela Böhm und Jens Häsel (hrsg.), *Hugenotten zwischen Migration und Integration. Neue Forschungen zum Refuge in*

Berlin und Brandenburg, Metropoli: Berlin, 2005, S. 221–239.

- ⑨ エグノーの歴史叙述について検討した以下の研究が代表的である。Rosen-Prest, Viviane, „Willkommene Fremde? Zwei Jahrhunderte Geschichtsschreibung über Hugenotten im deutschen Refuge (17–19. Jahrhundert)“, in: Becker, Judith und Bettina Braun (hrsg.), *Die Begegnung mit Fremden und das Geschichtsbewusstsein*, Vandenhoeck und Ruprecht: Göttingen, 2012, S. 137–153. また、二十一世紀までのプロイセンにおけるエグノーの自己認識の変遷を、言語の観点から俯瞰した研究もある。Böhm, Manuela, *Sprachenwechsel. Akkulturation und Mehrsprachigkeit der Brandenburger Hugenotten vom 17–19. Jahrhundert*, De Gruyter: Berlin, 2010.

- ⑩ 本書刊行の八年前に出版されたニッケマンによるエグノー通史研究では、受け入れ政策の動機が受け入れ側の内政的・外交的利益という観点で説明されている。以下参照。Niggemann, Ulrich, *Hugenotten*, Böhlau: Köln, S. 57–63.

- ⑪ 移民受け入れをプロイセン的「寛容」の好例として扱ったプロイセン通史研究として、特に影響力が大きいと考えられるのは以下の二つである。ハフナー・セバスティアン「図説プロイセンの歴史―伝説からの解放」東洋書林・魚住昌良訳、二〇〇〇年。Clark, Christopher M., *Iron Kingdom. The Rise and Downfall of Prussia, 1600–1947*, Belknap Press of Harvard University Press: Cambridge, 2006.

- ⑫ 例として「新ポツダム寛容令」[Neuer Potsdamer Toleranzedikt] 運動が挙げられる。以下参照。https://www.potsdam-mer-toleranzedikt.de/das-neue-potsdamer-toleranzedikt/das-edikt-von-potsdam-1685/【二〇一〇年三月七日閲覧確認】また、以下の参照された。拙稿『《史料紹介》フリードリヒ・ヴィルヘルム「ボン

ダム勅令(二六八五年)」「フェネストラ―京大西洋史学報」第二号、一七―二二頁。

- ⑬ Rosen-Prest, Viviane, „Paul Erman (1764–1851): Ein Sprossling der Französischen Kolonie geht seine eigenen Wege“, in: Violet, Robert, Manuela Böhm und Jens Haseler (Hrsg.), *Hugenotten zwischen Migration und Integration. Neue Forschungen zum Refuge in Berlin und Brandenburg*, Metropol, Berlin, 2005, S. 221–239. Buchloh, Ingrid, *Die Harlans. eine hugenottische Familie*, Verlag der Deutschen Hugenotten-Gesellschaft, Bad Karlshafen, 2007.

- ⑭ Birnstiel, Eckart, „Asyl und Integration der Hugenotten in Brandenburg-Preußen“, *Hugenotten und deutsche Territorialstaaten. Imigrationspolitik und Integrationsprozesse*, De Gruyter, Oldenburg, 2007, S. 139–154.

- ⑮ 日本では二〇〇〇年代から、フランスやドイツにおける研究成果の翻訳がなされている。以下参照。ノラ・ビエル編『記憶の場―フランス国民意識の文化』社会史Ⅱ七巻、岩波書店、谷川稔監訳、二〇〇二―二〇〇三年。アスマン、アライダ『想起の空間―文化的記憶の形態と変遷』水声社、安川晴基訳、二〇〇七年。同『記憶のなかの歴史―個人の経験から公的演出へ』松籟社、磯崎康太郎訳、二〇一一年。日本のドイツ史研究者からも、前近代と近現代を「記憶」や「想起」によって架橋しようとする試みが生まれている。松本彰『記念碑に刻まれたドイツ―戦争・革命・統一』東京大学出版会、二〇一二年。
- ⑯ 塚本栄美子「近世ベルリンにおける「フランス人」の記憶―第一世代シャルル・アンシヨンの歴史書―」『歴史学部論集(佛教大学歴史学部)』創刊号、二〇一一年、五一―六八頁。同「近世ドイツにおける信仰難民とその子孫たちの集合的記憶の形成―ブランドンブルク・プロイセンのユグノーたちを事例に―」『歴史学部論集』第七号、二

〇一七年、一九―三六頁。同「宗教的マイノリティの「記憶の場」―ベルリン・ユグノー博物館―」『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』第四号、二〇一八年、五七―八一年。

- ⑰ 今野元「世界に冠たる日本学界」への道」、現代史研究会二一月例会、於早稲田大学、六頁。 <https://researchmap.jp/hajimekonno/presentations/17467393> [二〇二〇年二月二日閲覧確認]。

(128 S. mit 2 Karten, 2019, C. H. Beck, München, 995 €)
(京都大学大学院文学研究科修士課程)